
爆弾と彼女

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆弾と彼女

【Nコード】

N3509K

【作者名】

kuroyumi

【あらすじ】

背中合わせの男女トイレ。

壁越しに聞こえてきたのは爆発音で……

ボンッ！

ケツからぴよんと跳ね上がった。

「な・・・っ！」

続いて、

ボンッ！ぶすぶす・・・ぶしゅ・・・。

洋式便所からさっと腰を上げ、かべを蹴っ飛ばす。

「うっせぞ！静かにしろっ！」

「あんたも高校生のくせに便所でタバコなんか吸ってんじゃないわよ！」

あゝくさい、くさい。うえ、吐きそ

吐きそゝ、吐きそゝというつめき声がうらめしそうに漂う。

声の主は女子。

この高校の便所はなぜか男女の個室が背中合わせになっている。

(もち入口は別々)

と、言っても本来の目的のために利用されることはめったに無い。

陰湿ないじめの場、ゲーム室、そしてこの階だけは

火災警報装置がついてないので喫煙所になっていた。

「制服においが染み付いたらどうしてくれんのよ・・・。

あつ、あんたの口からでた煙がわたしの服に・・・いやゝ最悪」

もう一度壁を蹴る。

「うつせえ！そつちこそ爆弾なんかつくってんじゃねえよ、バカ！」
急に声が消えた。

出てったか？と思った矢先、また
ボンツ！

「……………なんでわかったの？」

「はあ？」

「わたしが造ってるもの……もしかして、千里眼？」

「違う」

「だよね」

「ってかほんとに爆弾つくってんのかよ!？」

もち比喩だ、ヒュ。

確かに爆竹とはちょっと音が違う気がする、けど……。

「YesといえばYes、Noかと言われれば……Yesね」

「Yesじゃねえか」

「そつともいっ」

「そつとしかいわねえよ」

だめだ。これ以上付き合つてらんねえ。
便所の中にタバコを捨てて、レバーをひねり、
何か言われる前に出て行った。

・・・#・・・

「この煙は・・・またあんたね！」

「煙で分かるわけねえやろおが！」

「ほら、やっぱあんただ」

こいつ・・・かまかけやがった。

もういないだろうと考えてまた同じ個室に入ったのが間違いだった。

「タバコ止めてくんない？ほんとダメなのよ、その匂い」

「お前のために止める義理はねえ」

「あなたの煙がわたしの優秀な思考回路を遮るのよ」

「”優秀な”？」

「ダメ？じゃあ・・・”華麗な”」

「どつちにしろダメだ」

ボンッ！

爆発音が響き渡る。

「けほ、けほっ・・・火薬の量間違えたかしら？」

「頭のネジの閉め方間違ってるじゃね？」

「どづいう意味？」

「そづいう意味」

「そづいう意味か・・・」

「なに納得してんだよ」

へんなやつ・・・。

「ところでさあ」

「・・・」

「聞かないの？」

「ああ・・・趣味は？」

「えゝ趣味は読書とテニス、静と動ですね、ははは・・・
じゃなくて！」

「好きな食べ物は？」

「さばの煮付けだなあ、あれゝ飯とよく合う・・・
じゃなくて！」

「なんで爆弾造ってんの？」

「そう！それよっ！」

「そんな鬼の首取ったみたいな言い方すんなよ……」

「聞きたいでしょ？」

「いや、別に……」

「聞きたい？しょうがないなあ」

「だから別について……」

「あのねえ」

さっと便所から立ち上がり、出て行った。

……#……

「よしよし、今日はいねえな」

しばらくドアの前で耳を澄ましていたが

爆発音は聞こえてこなかった。

そもそも爆発音がある時点でおかしいんだけど……。

便器にどんつと腰をおろしタバコに火をつける。

久しぶりにゆっくり吸えそうだな……。

「……けほっ、けほっ」

「っ！居たのかよ!？」

「タバコ嫌って言ったのに・・・けほっ」

「しらねえよ、お前の好き嫌いなんかよ！」

「・・・そうよね・・・」

「・・・」

「気にしないで。」

「・・・男なんてみんなそうよね」

なんだこのテンションの下がり方。

俺、なんか悪いことしたか？むしろトイレで爆弾造ってるほうが悪いだろ。

正論だと理解できたのに、なぜか”納得”できなかった。

「・・・聞きてえ」

「え？」

「お前が爆弾造ってる理由」

「ほ、ほんとに!？」

なぜかきゃんきゃん騒ぐ子犬の姿が頭をよぎった。

「ああ」

「しょうがないなあ、そこまで言うなら話してあげよっかな」

ズドンッ！

「あのねえ」

「おいおい、スルーしていいのか!？」

”ズドンッ”て・・・”ボンッ”より進化してんじゃねえか。

「わたしは爆弾でここを吹っ飛ばすの」

「ここって・・・便所こか？」

飛び散った汚物の処理どーすんだらう？

「違う違う。この学校よ」

「マジ?」

”本気”と書いて、マジよ

「ふん・・・ま、頑張つて」

「あら?なにそのキの抜けた炭酸みたいな反応」

「いや、まあ、なあ？」

「この学校にそんな愛着あるわけじゃねえし」

「・・・それと爆発させる時間は明日のお昼休み、

もちろんわたしがこの手で起動させる」

「死ぬ気？」

「そうね・・・うん。」

「人殺すんだから自分も死ななきゃね」

「へえ・・・」

「疑ってる？」

「いや」

「ホントに？」

「“本気”と書いてマジ・・・だ」

「そう・・・」

また沈黙。

けど、さっきのとは違う、全然違うものだ。

「じゃ、また明日」

「また明日って・・・！」

「話聞いてた!？」

「ああ、いいじゃん。」

「世紀のXデーの現場に立ちあわせてくれや」

見えないあいてにひらつと手を振ってその場をあとにした。

・・・#・・・

「居る？」

「ああ」

「タバコはいいの？」

「嫌いなんだろ？」

もともと何となく吸ってただけだ。好きじゃない。

「爆破時刻は？」

「13時ジャスト」

「・・・あと5分か・・・急じゃね？」

「人生、一寸先は闇よ」

「使い方間違ってる・・・たぶん」

あと3分。

「なーんかぱつとしねえ人生だったなあ」

「そっなの？」

「少なくとも人に自慢できるようなことあ何もねえ」

あと2分。

「・・・わたしも」

「爆弾造れるのは結構自慢できるんじゃない？」

「かもね。でも、自慢する相手いないし・・・」

あと1分。

「わたしってさ、一度も誉められたことないんだ

・・・親にも、誰にも」

あと30秒。

「」なんであんたを産んだのかしら”。」なんでいるの”
・・・口癖だった」

10秒。

「俺がいる」

3。

「他の誰も知らなくても、俺は知ってる」

2。

「だから最後に誉めてやるよ」

1。

「頑張ったじゃん」

0。

・・・#・・・

・・・#・・・

「あれ？不発」

「・・・切ったの」

「ん？」

「導火線、切ったの」

「どして?」

「だって・・・っ!」

しゃくりあげる声が聞こえてきた。

「だってっ!」

あんたと話すのが・・・楽しいんだもん」

「・・・」

「・・・」

「まあ、それはそれで・・・」

「いじめ?」

「いや、誤ることじゃねえし。」

まあ、おれもちよっとはさ、楽しかったよ、お前と話すの・・・刺激的で」

「誉めてる?」

「まあ、半分・・・」

「残りは何よ!」

ぎゃーぎゃー騒ぎ始めた。

まあ、悪くはないな。

こいつと話すのも、いや、なんか会ってみてえな。

提案してみるか……。

問題は、

こいつのマシガン並みのトークのどこに俺の話を挟むか、だな。

これからの生活にすこし光が差し込んだ気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3509k/>

爆弾と彼女

2011年1月27日10時39分発行